

アメリカ家政学の系譜 — 学会誌分析 — (第9報) 家族関係・児童学
 三重大教育 ○吉本敏子、 椋山女学園大生活科学 東珠実、 (株)アルバイト
 渥美美晴、 金城学院大短大 古寺浩、 名古屋文理短大 鈴木真由子、
 西遠女子学園 藤田亜子、 静岡大教育 村尾勇之

目的 本研究の目的は、アメリカ家政学会誌分析を通してアメリカ家政学の特質と研究の動向を明らかにすることである。これまでの報告では、分析の全対象論文の特定とその年代別・領域別特徴を把握し、さらに「家政学原論」「家庭経営学・家庭管理学」「食物学」「家庭経済学」「消費者問題・消費者教育」「家政教育学」について概観した。本報では「家族関係」「児童学」の2つの領域に属する研究論文の特徴を把握しながら、その系譜を明らかにしようとした。

方法 前報に準ずる。ここでは分析対象論文 5,765本のうち「家族関係」領域に属する論文 206本と「児童学」領域に属する論文 228本について次のような分析を行った。①分析対象論文を中分類領域に分け、年代別領域構成を明らかにした。②偏差パターン類似率の算定とクラスター分析によって年代間の類似性をみた。③各年代における重点領域を中心に個々の論文について主にタイトルを中心としたキーワード分析を行った。

結果 (1)「家族関係」領域：①年代別論文数とその割合は全期間を通して漸増傾向にあった。②中分類領域の構成比は総体的には「現状」「家族問題」「理念と研究方法」が多かった。③年代間の類似性をみると4つのグループに分けられるが、1940年代と1980年代、1930年代と1950年代が最も類似していることがわかった。(2)「児童学」領域：①年代別論文数とその割合は1930年代から1970年代にかけて漸増傾向がみられた。②中分類領域の構成比から、児童学の興味や関心は「保健」から「発達」へと移ってきたことがわかった。③年代間の類似性をみると、1910年代と1920年代、1930年代と1940年代、1950年代から1980年代の3つのグループに分類できた。その他、各年代の論文のキーワード分析から、各領域の研究動向を具体的に把握することができた。